

Jazz Interview Vol.4

今、注目のトランペッター クオン・ヴー

1969年9月19日、ヴェトナム・サイゴン生まれで、パット・メセニー・グループ (PMG) の一員として、アルバム『スピーキング・オブ・ナウ』、『ザ・ウェイ・アップ』に参加するなど、アメリカを中心に世界中で活躍する注目のトランペッター、クオン・ヴー (Cuong Vu)。

自身4枚目となるリーダー作で、初の国内盤となる新作『残像』リリース直後のインタビューが実現した。同じアジア人として、その誇り高さミュージシャン魂を感じ取って欲しい。

取材 & 文：加瀬正之



——新作『残像』は、PMG 加入後最初のリーダー作品となりましたね。

『残像』は、前作『Come Play With Me』、『Pure』の2作品で表現された音楽を拡張・発展させた作品なんだ。即興に関しても、これまでの全くの自由な形と違って、事前に描いたフォームに沿う形で展開させながら、これまで以上に“happy”で“pretty”な感じのハーモニーが聴き取れると思うよ。これは僕自身の中で反逆的な気持ちが高まってきたことも起因していて、様々な事柄を柔軟に許容できるようになっていたということかな。『残像』は、何かを熱望する感情だけでなく、過去に思いを馳せる感情も含まれているんだ。2004年の夏頃にアイデアやコンセプトが思い浮かんで、ツアーを通してバンドで演奏しているうちに形になっていったんだ。

——レコーディングのメンバーについて

トム (Stomu Takeishi/b) に出会う前までは、自分のアプローチや曲にフィットして一緒に即興を楽しめるような理想的なベーンストはいなかった。でも、過小評価されている点はどれも残念だね。彼は革新的で、そのサウンドから音の構造や動き、即興性を最高の形で引き出してくれる天才的なミュージシャンなんだ。異次元的で空中をさまようかのような独特のサウンドやその構造はとても興味深い。トムと一緒にプレイできることに最高の喜びを感じているし、ラッキーだと思っている。現時点では、僕の音楽人生で最高のベース・プレイヤーだよ。テッド (Ted Poor/ds) に関しても同じで、彼と僕の音楽を深く理解して、僕とトムとジャスト・フィットするドラマはいないと思っている。最高のメンバーを探すということは残りの人生を共に過ごす配偶者やパートナーを見つけることと同じで、とても時間がかかることだよ。ゲスト参加のビル・ブリゼール (g) とは、フランスで行われたフェスティバルで、僕のバンドが彼のバンドのオープニング・アクトを務めたのがきっかけだね。また、彼はシアトルに住んでいたし、僕はシアトルで育てて母親もまだ住んでいる関係で、彼の家に招待されたんだ。僕のガールフレンドと2人で行ったんだけど、その時に彼の奥さんが最高の手料理で僕等をもてなしてくれて、とても素晴らしい時間を過ごしたんだ。それから、シアトルで互いのギグで共演する機会があって、僕が欲しかったロック・ギターのサウンドを出せるだけでなく、僕等の即興にもちゃんと応えてくれたりと最高の化学反応をみせてくれたんだ。だから、今回迷うことなく彼に声をかけたんだよ。

——PMGの『Speaking Of Now』ではヴォーカルをとっています。『残像』ではヴォーカルのアイデアはなかったのですか。僕の1stリーダー作品『Bound』では一曲歌っていたんだけど、歌うことへの好奇心を満たすにはあの一曲で十分だよ。真剣に

取り組むには、ことばの意味や曲のアプローチやコンセプトを十分理解して、音楽をどう表現すべかをちゃんと考えるなど様々な準備がいるはずだからね。PMGでは歌というよりはコーラス的な要素が強いから、問題なくこなせていると信じているよ。でも、いつかは僕のヴォーカルをフィーチャーしたレコードを作りたいね。

——PMG加入のきっかけは…パット・メセニーがインターネット・ラジオであなたのプレイを聴いて、直接電話を掛けてきたという逸話は有名なすね。

10代の頃に最も崇拝していたミュージシャンの一人だったから、パットからの電話には本当に驚いた興奮もした。けど、僕がやってた音楽とはある意味正反対の部類に属していたから、最初は一緒にプレイすることに少し違和感を覚えていたのは事実だね。それに、僕は人に合わせてプレイするスタイルを望んでいなかったし、彼の方法やスタイルに身を委ねるための時間的余裕や精神的余裕があるかわからなかった。でも、PMGでの経験は全てがとても重要だった。各地をツアーしたり、レコードを作ったりする際のビジネス面だけでなく、精神面や人間関係において多くの貴重なことを学んだんだ。それと、一番良かったのは、子供の頃から尊敬してきたミュージシャンに対して偶像化ともいえる想いを抱いてきたけど、彼等も普通の人間なんだとわかったことで親近感を持てるようになったし、自分の自信にもなったね。でも、パットという人は自分の希望や望みを実現する術を知っている世界でも数少ない特別な存在の人だよ。もし彼が競走馬だとしたら、迷うことなく毎回彼に賭けるね (笑)。

——作曲について

僕は作曲の初期段階、表面をなぞっているようなものだよ。コツは得ているつもりだけど、まだ学ぶべきことがたくさんあると思っている。大学時代に作曲法のクラスをとったけれど、今でもその頃得た知識のかけらを駆使しているような状況なんだ。作曲家として成長するには、もう一度真剣に取り組む必要があると思っているし、如何にしてリスナーを惹きつけられるかが一番核心の部分だけど、たくさんの音で奇想天外な印象深いサウンドを表現するよりも、ひとつの音に特別な感情やアイデアを込められるようにしたいんだ。

——あなたは演奏家の父、歌手の母を持つ音楽一家で育ったそうですが、幼い頃聴いた音楽について教えてください。

5歳くらいまでは、ヴェトナムのポップ・ミュージックなど両親が演奏したり、聴いていた音楽が好きだった。アメリカに移住した後は、ラジオから流れる音楽を聴くのが好きだったけど、両親がミュージシャンだったから、聴くこと以上にプレイすることに

興味を覚えたのはごく自然の流れだったようだね。僕がトランペットを吹き始めた時、父からリリー・ジュームスのレコードを買ったんだ。中学生の時はクリフォード・ブラウンを聴いたね。高校時代はフュージョンが好きで、ギタリストに夢中だった。マイク・スターンやジョン・スコフィールド、ロックっぽい感じはしなかったけどバット・メセニーなんかをよく聴いていた。それ以外にも、ヴァン・ヘイレン、レッド・ツペリンも好きだったし、渡辺香津美のレコードも好きで聴いていたよ。それとステップス・アヘッドになる前のステップスね。特にマイケル・ブレッカーは好きだった。

——ヴェトナムで生まれ、6歳の時にシアトルに移住。その後、80年代終わりにボストンへ、94年からニューヨークへ…

シアトルでは、純粋に学生生活をエンジョイしていただけで、バンドとか具体的な活動はしていなかったんだ。だから、僕にとって本当の意味での音楽的なキャリアは、大学時代の終わり頃まで無かったと言えるね。シアトルに居た頃は、地元のジャズを聴きに行ったりもしたけど、ソフト過ぎるというか、とても保守的な印象を受けたね。当時はエネルギー感あるロックの方が好きだったんだ。高校時代や大学に入った後の数年間は4ビート・ジャズもよくプレイしたけど、自分にとってはあまり魅力を感じなかったし、本当にやりたいものではなかったんだ。でも演奏する上での方針論としてはとても重要だったし楽しかったね。NYでは、シアトルと比べてミュージシャンの多さやレベルの高さを痛感したよ。NYで自分のレコードを作れたことは、自分の考えていたコンセプト・音楽を形にするという意味でとてもいい経験になったし、作曲面やテクニクの向上にとっても大きな影響を受けた。バンドやレコーディング全体のことを考えるというプロセスは何処か顕微鏡で調べて分析する作業に近かったね。

——音楽人生の転機

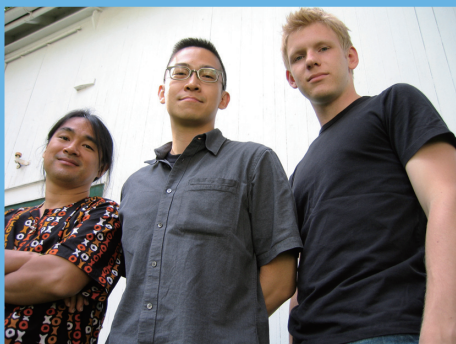
僕をクラシックに目覚めさせてくれたストラヴィンスキーの「春の祭典」やベートーヴェンの交響曲第3番 変ホ長調「英雄」を聴いた大学2年目の頃だね。その素晴らしいさを吸収していくうちに、クラシックとジャズの接点が見えてきたんだ。その後は、ジョージ・ガソーンをフィーチャーした“The Fringe”を最初に聴いた時だね。彼らは僕に即興という自由な世界に目覚めさせてくれた。これら2つの出来事は僕に音楽面での可能性を広げてくれたんだ。それを機に、他人のコピーではない僕自身の個性的な音楽を作ろうと思い始めたんだよ。

——母国ヴェトナムについて

ヴェトナムに関しては、怖くて悲しい思い出ばかりなんだ。母親や親戚も戦争の影響でもっと安心して生活できる状況ではなかったからね。それに僕の家族は決してヴェトナム語を話さなかったから、ヴェトナムでの生活や思い出は忘れるべきもののように感じながら育ったんだ…。いつかまた訪れてみたいと思うけれど、まだ心の準備が出来ていないような気持ちもある。でも、もし僕のバンドをヴェトナムに呼んでくれるなら、とてもエキサイティングなことだね。

——デヴィッド・ボウイや日本人ユニット“チボ・マツ”との共演歴があるそうですね。

僕が所属していたバンドの歌手で友人の“Holly Palmer”という女性が、以前デヴィッド・ボウイのバンドにバック・シンガーとして参加していて、その彼女を通して彼のレコーディングへの参加の話が来たんだ。そのレコードというのは、結局お蔵入りとなってしまったんだけど、あの名盤『ジギー・スターダスト』からの未発表曲やリメイクに関する作品だったんだ。でも、あんな偉大なアーティストと一緒に仕事をできたということは、とても貴重な経験となったね。チボ・マツとは、彼女達の2枚目のレコードがリリースされた時に、NYの「Bowery Ballroom」でのギグで雇われたんだ。あと、TV放映された「Live at Studio



Stomu Takeishi (b), Cuong Vu (tp), Ted Poor (ds)

54)でも共演した。彼女達のエナジーと創造力の豊かさは凄いよね。僕自身とてもエンジョイしたよ。

——共演してみたいミュージシャンはいますか

いつかビョーク (BJORK) と共演してみたい。他にもたくさんいるけど、縁やチャンスがあればという感じだね。だって今、自分のバンドで大好きなミュージシャン達とプレイしているわけだからね。

——2006年のプラン

2006年は自分のバンドとそれ以外にもツアーがたくさん入っている。今の所、日本ツアーの予定はないけど、実現できたら最高だね。それに僕らのバンドにはツトムという素晴らしいガイドもいるから、どこに行けば美味しい食べ物があるか迷わずに済むしね(笑)。

——将来の夢や人生のゴールについて教えて下さい。

突き詰めると、みんなと平和に幸せを感じながら毎日暮らしていきたい。僕自身、心地良く謙虚な暮らしを望んでいるし、自分の気持ちに忠実に音楽に携わっていきたくて思っているんだ。ミュージシャンとして、単にお金儲けのことを考えるのではなく、常に妥協せずに年を取ってもずっと音楽に関わっていけたら最高だね。

——最後に『The Walker』読者にメッセージをお願いします。

この『The Walker』を通して、僕のことを知ってもらい、僕が心を込めた音楽を楽しんでもらえれば嬉しい。また、もし僕がやろうとしていることが理解できない人がいても、身を委ねる様に耳を傾けることで僕の音楽から何かを感じ取ってもらい、未知の世界に誘えれば最高だね。

PMGのトランペッター、クワン・ヴーの最新作!!



『残像』 クワン・ヴー

ビル・フリゼール全曲参加!

intoxicate records
intx-1007 ¥2,300 (tax in)
Now On Sale!